



道心

門出と出会い

「意の発し方で出会いは生まれる」

山主 横山 正賢

新緑のこのころは新たな出会いの季節でもある。私の身边でも孫二人が中学校に入学した。親しかった友人や通い慣れた学舎との別離と、入学の新たな諸々との出会いに、幼子の胸中は不安と興味に揺れていることだろう。新たな出会いの良きことを祈るばかりである。

私にとって大きな懸案であった次男の独立の問題が、昨年末に俄に持ち上がり、今年四月一日付けで山口県下の寺に住職を委嘱された。田布施町に在って檀家数数十軒の小院ながら檀信徒は良くまとまって、四十年間も住職が居住していなかった伽藍を維持してこられたことに頭が下がる思いである。

愚息は寺の経済が自立して立てられない貧乏の将来に悲観的な考えはないようである。むしろ期待されている自分の生き方を考えているようで秘められた頼もしさを感じさせる。

貧乏といえ豊かな農漁村に加え人情豊かな地域は、愚息自らの求道と法苗の種蒔きには恰好の場であると思ふ。

経済的に満たされた環境であれば、人は育ち活かされるかと云えば、そうではないことの方が多いように思ふ。

逆に経済が不如意という環境での、事物物との出会いは、満たされているという環境よりも、自らが活かされ育まれるように思ふ。

出会いの一つ一つに育まれ、活かされていくことを体感出来ることと思ふ。

門出の饒に私自身が出家し師匠の元で最初に会った祖訓、学道用心集の一節を贈りたい。

「古人云く、発心正からざれば万行空しく施す」と。

誠なる哉この言、道を行ふことは導師の正と邪とに依るべし。

機は良材の如く、師は工匠に似たり、縦い良材と雖も、

良工を得ざれば奇麗未だ彰れず。縦い曲木と雖も、

若し好手に遇わば妙功忽ち現れん。

師の正邪に随つて、

悟りの真偽あること。

これを以つて曉るべし。

と仏道修行の用心が示されてある。

解説するまでもなく読んでいただければご理解いただけることと思ふ。

仏道修行を私たちの暮らしに置き換えしてみる。

「古人云く」といわれる人は中国天台山の高僧のことで、「ものごとの最初の志が正しくなければ、全てを空しく過すこととなる」と、「機」とは学ぶ側であり、「師」は云うまでもなく教える側である。どんなに優秀な素材であっても、これを活かし切る立派な工匠に出会わなければ良材を生かし切ることは出来ない。

たとえ曲木といえども好手に出会えば妙功忽ち現れる。と自分の人生を振り返ってみると、師としても親としても欠陥だらけの己だが、授かった子らはきつと他と比べようもない良材であったろうにと思ふし、「妙功忽ち現れる」とは程遠い未完の己を恥じるばかりであるが、彼らの前途が勝縁に恵まれることを祈り、数え切れない出会いに活かされている自分を感謝せずにはおれない。

老いたといえ幼子達の未来に繋がる出会いを創出し得る日々でありたいと願ふ。

夏の章 第8話



人間を駄目にする “三毒”さえも 大切な命のエネルギー

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

「市主催の『青少年健全育成大会』に、お話をうかがった時のことです。

大きな会場の正面脇に、『愛の手で非行の芽を摘もう』というスローガンが大書きされておりました。

演壇に登った私は、ついつい強い口調で言ってしまうました。「このスローガンは、好きになれません。愛の手で非行の芽を摘もう」という姿勢ではなく、愛の手でよい芽を伸ばそう」という姿勢でなければならぬのではないのでしょうか」
『次郎物語』を書いた下村湖人に薔薇をうたった詩があります。

あなたとわたしとは

いま薔薇の花園を歩いている。

あなたは言う、

「薔薇の花は美しい。だが、そのかげには

おそろしいトゲがある」と。

けれども、わたしは言いたい。

なるほど、薔薇にはトゲがある。それでも、

こんなに美しい花を咲かせる」と。

同じ一本の薔薇を見ていても、美しい花に目を注ぐか、トゲのほうに目を注ぐかで、そこに開かれてゆく世界は、まったく違ってしまいます。

一方は許された暖かい世界となり、一方は非をとがめあう冷たい世界となります。

ここで私たちがしっかりと認識しておきたいのは、おそろしいトゲを作るエネルギーも、美しい薔薇の花を咲かせるエネルギーも、同じだということです。別ではないということです。これは私たち人間も、同じこと。

たとえば若い人たちが非行に走るエネルギーも

よい方向へと育つエネルギーも、同じ一つのエネルギー。摘むことしか考えなかつたら、出る場所を失ったエネルギーはますます曲折し、鬱積してゆきます。誰しもが必ずよい芽を一つは持っています。

その芽を探し、「あなたはここが素晴らしい」とその芽を褒めてどんどん伸ばすようにすれば、非行に走るエネルギーは少なくなるはずですよ。

——いまから約2千500年前。ある日、お釈迦さまは弟子たちと大きな河の渡し舟に乗りました。舟が朽ちかけていたのでしようか、河の真ん中あたりで浸水し始めました。そこでお釈迦さまは弟子たちと呼びかけ、みんなで力を合わせて水を汲み出し、なんとか無事に向こう岸へ着くことができました。

その時お釈迦さまは、この舟旅にたとえて人生の旅のありようを、こう説きました。

比丘よ

この船より

水を汲むべし

汲まば

汝の船は軽く走らん

貪りと瞋りを断たば

汝は早く涅槃に至らん

”比丘”とは、出家して修行に専念している男子のこと。女子は”比丘尼”です。

この教えについて、敬虔な仏教徒であり、随筆家の江原通子先生は、

「舟を沈める水も、舟を浮かべ、推し進めてくれる水も、同じ水なんです」と語ってくださったことがあります。

私も、江原先生に大賛成。

浸水してきた水をそのままにしておけば、舟は沈んでしまいます。その水を汲み出せば、舟を浮かべ、推し進める水になります。

人を駄目にする三毒——貪・瞋・痴

さきほどのお釈迦さまの教えに「貪りと瞋りを断たば」とありますけれど、この「貪りと瞋り」というのは「三毒」のことです。

仏教では私たちの数限りない煩惱を分類し、そのいちばん根源になるものとして「貪・瞋・痴」の3つをあげ、これを三毒と呼んでいます。

「貪」とは、愛情やお金や名声を、美味しいものや、気持ちのいいことを「もつと欲しい、もつと欲しい」と、際限なく貪ること。

「瞋」は、自分の意にそわないこと、心かなわぬことに対して瞋り（怒り）腹立つ心のこと。

「痴」とは、天地自然や人間社会における、すべての道理に暗いこと。

この3つの毒は個別に働くものではなく、一つのものとして噛み合いながら働くのですが、中でもいちばんの猛毒は痴——道理に暗いということでしょう。

たとえば私たちのこの体は60兆の細胞が、一つの命として一糸乱れずに、お互いに関わり合いながら自分の持ち場の役割を十分に勤めてくれていてお陰で、刻々を安らかに生き続けていられますのです。

それぞれの細胞が孤立して勝手に動き出したり休んだりしたら、一刻もこの体は生きておれず、あるいは正常な働きはできません。しかもその60兆の細胞はそれを包んでいる皮膚の

中だけで独立して存在しているのではなく、太陽の光や引力から始まって、酸素、水などなど、天地いっぱい、宇宙いっぱいのお働きをいただいて、ようやく生き得ているのです。仏教詩人の榎本栄一さんはこの道理を、とてもわかりやすく詠じています。

一日が終わると
インドの人 中国の人 日本の私
みんな同じねむりを
大自然さまからいただく

眠ることができる、一息の呼吸ができる、すべて天地いっぱいのお働きをいただいてこそできるというのです。

地球も一つの生命体として、一切の物が関わり合いながら存在している——この道理をよく理解できるようにになると、私という一個の命のありようも、一つの命である地球の中の一細胞として、地球的視野のもとに考え行動しなければならぬということも、おのずから分かってまいります。天地の道理にかなった生き方とはそういうことであり、その道理に暗いのを「愚痴」というのです。

本当の大人を「菩薩」と呼ぶのです

よく私たちは、「あの人は愚痴ばかり言って、嫌ね」とか言いますよね。みなさん、憶えがありますでしょうか？

この場合の愚痴は、道理が分かっているがゆえの、人さまや世間への恨みつらみ、嘆きを口にする。ですから、愚痴ばかり言う人は、周り

から疎まれ、嫌われがちなのです。でも私たちはみんな凡夫——普通の人ですから、この道理がなかなか分かりません。

私たちは、天地の道理、真実の姿に暗いがゆえに「痴」、小さな私のみに固執し、その思いにかなうことは限りなく追いかけて「貪」、かなわないと怒り腹を立てる「瞋」のです。

ここでもう一度、先ほどのお釈迦さまの教えを読み直してみましようか。

日本語訳では「貪りと瞋りを断たば」となっていますけれども、断つたり除いたりするのではなく「転じる」と解釈する方がよいのでは、と私は思います。なぜなら、泥を捨てたら蓮の花も咲かないように、泥こそが肥料となるように、欲は大切な命のエネルギーだからです。欲がイコール悪ではありません。

ただ天地の道理に暗いばかりに小さな自我の満足の方向にのみ暴走させた時、煩惱となり、小さな自我の囲いから解放放つて天地いっぱい一つ命という方向に向け変えることができた時、煩惱の欲はよいエネルギーへと変わり、舟を浮かべる水となります。

人間の欲望も、欲するままに暴走させると破滅に導きます。といって、欲をまったく禁じたら生きてゆくこともやめねばなりません。欲をコントロールし、あるべきように方向づけができた人を社会では大人と呼び——仏教では菩薩と呼ぶのです。

※ 本文は、青山俊重尼老師著

「悲しみはあした花咲く」光文社より
抜粋したものです。



旅への誘い

庭瀬 恵介

旅へのはじまりは、思いは色々であるが、私の旅への思い込みを記して見ることとした。

旅は玄関から一步出ることから始まる、いや縁側から庭に降りたときも旅ではと思う。

それは、昨日までの花木の様子も人との出逢いもその日その日の瞬間に異なるからである。品物のように、手に肌にあふれその物体を確認するようにはいかない。外に出て誰かと、何かと、出

逢った瞬間が旅そのものであるからである。私は、旅を通じて人生に大きな変化があったと思っている。

その一つは出逢いである。人との出逢い、食との出逢い、自然との出逢い、花木とのふれあい、地球の偉大さを感じる出逢い、加えて、同じ人間社会でも国が異なること言葉、顔、行動、食べ物、何を取り上げても驚きの出逢いである。遠くへ出掛けての出逢い、近くの公園、スーパーへ買い物に行く

ことによる出逢い、何か目的を持っていないとしても出逢いは、より人生に変化を持たせることを身を持って体験し、実感している一人である。

次に、生きることに対する食欲が増すこと色々な人々に逢うことで、また次の機会にもあの人と、いやまた別の人との出逢いも……と思うようになったり、あの食べ物が大変美味しかった、また今度食べに行こう、いやあれ以上の何か美味しいものを発見できなかったか、あの温泉に入り本当にリラックス出来た、もう一度行ってみたい、いやあれ以上の温泉を探して見ようとか、色々考えが膨らみ生きる喜びが旅を通して増す日々である。

次に、人の輪(和)の大切さを知る。一人旅、二人旅、グループ旅、大勢での旅、旅の形態は色々あるが、その中で教えられることの一つに輪(和)がある。

私の感じている輪(和)とは、出逢

いの瞬間から、別れの瞬間までを通じて、ごく当たり前のことではあるが、マナーを守り、ルールを守り、他人に心配をかけず、無事終わりを迎えられること。

楽しい旅を演出するためには、参加者全員が健康であること、笑顔が絶えないこと、加えて、天候に恵まれることではないでしょうか。

終わりにあたり旅への誘いは、まず参加してみること、出掛けるまでは少し、いやな気持ちであっても何か発見出来、見知らぬ人との素敵なふれあいが生まれるからである。

人生「一生一瞬」少しでもおつくうがらず、まずは外に出ること。すなわち旅をすることである。

私の好きな俳人の一句
分け入っても

分け入っても 青い山

種田山頭火

某人からの手紙

この手紙は平成九年五月二十一日に亡くなった檀家のお婆ちゃんを通夜式に居合わせた、見知らぬ方からの手紙で、通夜での私の

法話をお聞き下さり、この手紙を寄せてくださいました。お話をさせていただいた、私の拙い法話の意

図する所を素直にお受け止め下さっていることを有りがたく思い、今日まで大事にしまっておいたものです。発信者の書面をお借りして「道心」をお読み下さる皆様へもお伝えし、たく此処に紹介します。

山主合掌

禅昌寺御任職様

本日、不思議な御縁により某家鈴子様の通夜式でお話を拝聴させていただきました者です。

談話の中で尊く生きる、豊かに生きるのお話にどうか、あ、そうかと聞かせてもらいながら、たてに首を振る私がいまいました。思い出しても十回以上上った気がします。

生命誕生よりの話、納得致しました。私の年は三十五億年と五十一才と言うことになりましょうか。私の命が強いものと教えていただきました。何か間違った生き方の方が多いことを知りました。この命をどう活かすか、ご住職の言われた、人により活かされた命なら回りの人に真心や親切、感謝で接すればいいことになりました。聞かされたすばらしいことをいかに実行するか継続できるかを自問自答することになりました。

まず、すばらしい真理をやさしくかみくだいてお話された明るい挨拶の実行、ゴミを捨てず拾うことから始めたいと考えます。幸せを豪華なものに求めず親切の実行により、ほのかな心地よさを感じることが出来れば、毎日が豊かになれるとお話下さいました。今日はすばらしい一日になりました。

五月十二日会社の研修旅行で鹿児島県の知覧特攻平和記念館へ皆と入館し、二十才前後の若者が死を前にした遺書を第一陣出撃より第六陣まで感動の涙で拝見して帰りました。御両親や兄弟家族をおもい友人知人に感謝をして国のゆくすえをおも、その子供のような純真な心を感じて帰りました。

色あせて見えた妻や子供が又、回りがピカピカに光ってみえます。その気持ちやすみそうになれば尊く、豊かに生きるとは何かと想い出す努力をしたいと考えます。

御任職様は自覚と話されました。まず私の足元から一步一步着実に年月をかけて出来ることから実行して行きます。私も社長の代理として年に何回となく葬儀に出席してきましたが今日のような哲学的な根本的なお話の中で、素直に心に残り感謝申し上げます。

某家鈴子様の霊も満足されておられると思います。一九一二年生まれ、八十五才のきびしい生涯を考えますと何一つ不平不満の言えない、恵まれた現代に生かさせていることを知ったすばらしい、すばらしい日になりました。

右御礼迄

禅昌寺 御任職様

東区 発信人拝

わたしの願い

サンフランシスコ日本語補習校
四年生の作文より

わたしの願いは、犬をかうことです。そう思い始めたきっかけは、半年くらい前「ねえお母さん、わたし小さな弟か妹がほしいな。もう赤ちゃんは生まないの？」と聞くとお母さんは、「あなたとやすひろくん、2人でもうじゆう分よ。だからもう赤ちゃんは生まないの」と、答えました。

わたしは、小さい子の世話をするのが大好きです。公園へ行っても、友達の家に行っても小さい子がいたら、いつしよに遊んであげます。

私の家に赤ちゃんが生まれないんだとおもったらきゆうに犬がほしいなと思いはじめました。そしてなにかでしば犬をみたたん、「ぜったいにしば犬しば犬がほしいな」と思いました。

お父さんに言うと、「お父さんもしば犬すきだぞ、あまり大きくならないし、おりこうだからね。」といいました。わたしはお父さんも同じ意見なのでうれしくなりました。

おじいちゃんやお母さんは、「でもだれがめんどうをみるの」「散歩だって毎日させなきゃいけないし」と言います。でもきつと大じょうぶ、わたしは全部めんどうをみる自しんがあります。

名前も、もう決めてあります。「ラッキー」です。なんでラッキーかと言

うと、アメリカでも日本でも通じるし、オスでもメスでもよくて、それに何か楽しくなりそうな名前だからです。

もしラッキーが家にきたら、散歩に毎日つれて行きます。きたなくならないようにシャンプーもしてやります。いつも健康に気をつけて、えさを食べさせてやります。

もしおばあちゃんが、ごはんの残りを持たせようとしたり、「おばあちゃん、いくら人間にはごちそうでも犬にやったら早死にするよ」と言おうと思いません。

むかしまだお父さんが子供だったころ、しば犬をかっていたそうです。そのころは、夜ごはんの残り物をよく工サにしていました。人間の食べ物は、犬には味がいいのできつと早く死んだんだつてお父さんがいいました。私はラッキーの体によいものを出さるだけたべさせてやりたいです。

それからしつても大切ですが、たとえば電話がなつてもほえないこと。でもどろぼうやあやししいひとには、ほえなくちゃいけないこと。日本語で、「おすわり」といっても、英語で「シットダウン」と言つても通じるように、パインガルの犬にしたいです。

こんなふうになつてほしい犬のことを考えています。車に乗っていると、きも犬ばかりがしています。

こうしてわたしの心のなかでは、いつラッキーが来てほしいようにじゅんじゅんしています。本当にラッキーに会えるのはいつだろうな。

「ラッキー、早くおいで！」

◆道心・趣味の会◆

短歌

喫茶店の片隅の椅子さびしけれ
九州なまりの母はいまなし

二羽の鳩左右に位置し電線を
大きく揺すりてこもごもに鳴く

東区 矢野淑子

俳句

子の侍を 祈るほかなし 雛飾る

月おぼろ 仏在ますと 仰ぐなり

当山二十二世 甲田 苔水

風起こし 風に溺れる 春の蝶

うとうとと 夢の出口に 花香ほる

安佐北区 岡村 竹畔

枯るるこそ 命の継承 葦芽ぐむ

初燕 異国めきたる 街の空

東区 河野 貞女

◆行事報告◆(二月〜四月)

●二月二十八日(土)に行われた青山俊董尼老師講演会は、大広間一杯の方々が参加されました。

●三月十四日(日)に行われた春彼岸法要及び護持会総会では老若男女家族連れの参拜者で賑わいました。

●三月二十七日(土)〜二十八日(日)四国八十八ヶ所十三番〜二十三番巡拝、三十四名の参加がありました。



四国霊場中唯一曹洞宗寺院、第15番札所 国分寺 (平成16年3月27日)

◆行事案内◆(四月〜七月)

■毎週定例行事

●暁天坐禅会

月曜日〜金曜日

毎朝五時十分より五十分まで

●水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会 終了八時半

●婦人坐禅会

毎週金曜日午後一時より坐禅・茶話会 終了三時(第一金曜日のみ坐禅の後、写経、茶話会)

■毎月定例行事

●上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第三金曜日を予定 午後二時から

※お抹茶と和菓子を楽しみつつもりでご参加ください。

●御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで

◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合があります。

初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認ください。

●日曜坐禅会

第一日曜日 午前九時より坐禅・茶話会 終了十時半

■恒例行事

●日帰り旅行

日時 四月三十日(金)

行き先 庄原国営備北公園・庄原かんぼの宿、午前九時広島駅発 参加者の最寄りの集合場所を巡って行きます。

「庄原かんぼの宿」にて昼食(希望者は温泉入浴)

参加費 六千円(昼食代・バス代)
※申込みは、四月二十日までに電話にて申し込み下さい。
最寄りの集合場所等は後日お知らせいたします。

四国八十八ヶ所 ご巡拝の旅(一泊二日)

●日時 五月二十二日(土) から二十三日(日)まで

●行き先 四国八十八ヶ所・二十四番最御崎寺から三十五番清滝寺まで

●集合場所時間 二十二日午前六時五十分集合、七時・広島駅新幹線口を出発
帰着は翌日午後八時半広島駅新幹線口を予定。

●参加費 一人二万五千六百円
(納経帳・軸・白衣は別途必要、一部駐車場よりのタクシー代含む)

※旅行の参加申込み・お問い合わせはお寺までお知らせ下さい(詳しいご案内をお送りします。)

申込み期限 四月末日

電話 〇八二二九一〇六一八

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。次号原稿締切は、六月末日までをお願いします。